

指導資料

生徒指導 第66号

—小学校,中学校,高等学校,特別支援学校対象—

平成26年10月発行

 鹿児島県総合教育センター

言葉でいじめる児童生徒への指導の在り方 —ポジション・チェンジのワークを活用して—

本県の「平成25年度いじめの問題に関する実態調査」結果によると、いじめの認知件数は14,196件であった。このうち、いじめの態様別の割合(図1)では、「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」が9,175件であり、認知件数全体の64.6%と最も高い割合となっており、全ての校種において最多である(文部科学省の平成24年度問題行動調査でも64.3%と最多件数)。

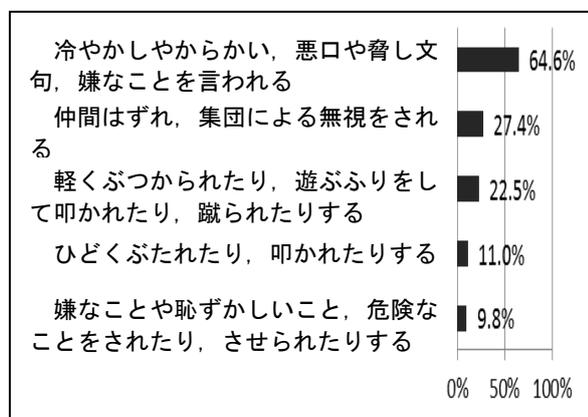


図1 いじめの態様別の割合<複数回答>
(鹿児島県教育委員会 平成25年度「児童生徒の問題行動について」)

このように、相手を冷やかしたり、からかったり、悪口・脅し文句・嫌なことを言う児童生徒(以下「言葉によるいじめをする児童生徒」という。)に対する指導は、いじめ問題における深刻化を抑止するためにも重要な課題である。そこで、本稿では、こうした「言葉による

いじめをする児童生徒」に対して、ポジション・チェンジを活用した指導について具体的に述べる。

1 ポジション・チェンジとは

ポジション・チェンジとは、ブリーフセラピー(短期療法)のワークの一つで、立ち位置を変える体験をすることで、相手の見え方や感じ方の理解を深める手法である。

言葉によるいじめの現場を発見した場合、いじめをする児童生徒に対して、「そのようなことは言ってはいけません。」と単に口頭で注意するのではなく、相手の立場に立って考えさせる指導を行うことが有効であることから、ポジション・チェンジのワークを活用した指導の在り方を述べていく。

「相手の立場に立つ」とは、自分と相手を客観的に見るということである。いじめられている相手の気持ちを理解できない児童生徒は、往々にして、教師の話聞いてはいるものの、表面的な反省やその場しのぎの理解になっている場合がある。そのために、いじめをする児童生徒は指導後も改善が見られず、「相手の立場に立つ」ことができずに、「また言ってしまった」という言葉によるいじめ

を繰り返すケースが多々見られる。

児童生徒が生活していく上で、適切な人間関係を築き、様々な状況を把握して、それに応じて柔軟に対応できるようになるためには、(自分の視点以外の視点、すなわち)相手の立場に立って考える能力が必要である。その能力を育成する体験の一つが、ポジション・チェンジである。

表1 ポジション・チェンジの3位置

- ・ 「第1の位置」：自分自身の視点。自分の考え方をもち、自分の感情を感じて相手を見る。
- ・ 「第2の位置」：相手の視点。相手の位置に移動し、自分が相手であるかのようにイメージし、相手の考え方や感情を感じるようにする。
- ・ 「第3の位置」：自分と相手を見ている第三者の視点。自分と相手の関係を中立的、客観的に見て、第三者の考え方や感情を感じる。

ポジション・チェンジでのポジションは、表1で示すように、「第1の位置」、「第2の位置」、「第3の位置」の三つの位置があり、これらの三つの位置を総称して「知覚位置」という。

相手の気持ちを理解できないために、言葉によるいじめをしてしまう児童生徒は、「第1の位置」に立つ傾向が強く、相手の考え方や気持ちに気付く「第2の位置」や、状況を中立的な視点で捉え、自分と相手の関係性に気付く「第3の位置」がよく分からない状態にある。

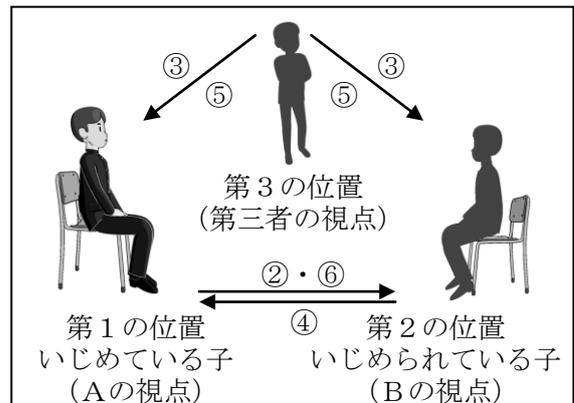
「第1の位置」に立つ傾向が強い児童生徒

は、いじめの指導の中で「先生はどうしてそんなに怒るんだ。」「自分は悪くない。相手が悪い。」と自己主張し、自分を省みて姿勢を変えることをせず、相手の非を攻撃してしまう傾向がある。

このようにポジション・チェンジは、他者理解を深めさせる効果があることから、いじめの指導において有効に活用できる。

2 ポジション・チェンジのワーク

ポジション・チェンジのワークは、自分のいる場所から動いて、相手のいる場所に移動して、立場を変えて、相手がどのような考えや気持ちであるかを体験しながらイメージするワークである。ワークの具体的な流れについては、次のようになる。



① 位置の確認をする

椅子を二つ用意して向かい合わせにする。指導される児童生徒Aが座る椅子が「第1の位置」、いじめられている児童生徒Bが「第2の位置」、そして、両方の椅子が見える場所が「第3の位置」となる。

② 第1の位置に移動する

指導されるAを「第1の位置」の椅子に座らせ、「第2の位置」の椅子にBが座っていることをイメージさせる。そして「第2の位置」に向かって、Bに使っていた言葉を言わせる。

③ 第3の位置に移動する

Aを「第3の位置」に移動させる。深呼吸をさせてから、「第1の位置」に座っている自分の姿を、「第2の位置」にBが座っている姿をイメージさせる。

④ 第2の位置に移動する

Aを「第2の位置」の椅子に座らせる。そして、Bになったイメージをもたせ、どのような気持ちになるかを考えさせる。しばらく時間をおいて、「第1の位置」の椅子に座っている自分に対し、Bが言い返したいことを言わせる。

⑤ 再度、第3の位置に移動する

Aを「第2の位置」の椅子から立ち上がらせ、再び「第3の位置」に移動して深呼吸をさせる。そして、「第1の位置」に座っている自分、「第2の位置」の座っているBの両方をイメージさせ、どのように見えるかを考えさせる。

⑥ 第1の位置に移動する

Aを「第1の位置」の椅子に座らせ、ワークを始める前と今とで、どのようなことに気付いたかを振り返らせる。

⑦ 第1の位置でリハーサルをする

Aに意識を未来に向ける質問をし、具体的な場面において新しい行動をとっている自分を想像させる。そして、想像したことを実際にリハーサル（練習）させてみる。リハーサルを見て、新しい行動が適切かどうか確認し、もし、うまくできなかつたり、問題があつたりした場合は、教師は適切な助言をしたりB役を演じてみたりして、Aがリハーサルしやすいようにして指導をする。

※ 前田^{*1)}（平成24年）を参考に作成。
具体的な内容は対応事例を参照。

このワークは、何回か練習することで実際に椅子を使って移動しなくてもイメージするだけでポジション・チェンジができるようになる。

3 ポジション・チェンジの質問の留意点

相手の立場に立って考え、行動できるようになるためには、「第2の位置」、「第3の位置」での教師からの質問がポイントとなる。

「Bはどのような気持ちになるだろうか?」、
「周りにいる人はAとBの関係を見て、どのように思うだろうか?」といった（はい・いいえではなく）考えたことを回答する質問（開かれた質問）をし、問題点や改善点に自ら気付いていくように促していくことが大切である。教師が答えを教えてしまうと児童生徒は自分で考えることをせず、相手の気持ちを十分に理解できないままで終わってしまう。教師が答えを教える姿勢ではなく、本人が答えたことに「そのように思うのだね。」と受け入れながら、「では、どのようにすることが大事だと思うの?」、「もし、そうだとするとこのような場面ではどう思うだろうか?」と、児童生徒が考えをより深められるように質問をしていくことが大切である。

4 実際の指導場面の対応事例

次に、具体的な事例を基にポジション・チェンジを活用した対応の実例を示す。

【 事例の概要 】

小学6年生のC男は体を動かすことが好きで、相手のことを考えずに思っていることをはっきりと言う性格である。運動会のクラス対抗リレーで優勝したいC男は、おとなしく運動が苦手なD子に対して、「走るのが遅いんだから毎日走ってろよ。」「優勝できなかったらD子の責任だからな。」と脅すようなことを言ったり、「D子が運動会を休むと優勝できるかもしれないのになあ。」と、D子が傷付くことを平気で言ったりしていた。D子が暗い表情で帰る姿に気付いた担任は、D子から詳しく事情を聴き、言葉によるいじめがあると判断した。担任はC男を呼んで指導を始めた。

*1) 前田忠志 著『脳と言葉を上手に使う NLPの教科書』平成24年 実務教育出版

【 C男との面談の実際 】

事実の確認： [] はカウンセリング技法による対応

教師：C男君、D子さんに「毎日、走ってる。」とか「運動会を休むといいのに。」とか言ったことは？

C男：言ったことは確かです。でも、D子をいじめるつもりで言ったわけではありません。

教師：いじめるつもりで言ったのではないだね【C男が答えたように返す】。

でも、D子さんはかなり落ち込んでいるよ。そのことをどう思う？【自由に答えられる開かれた質問】

C男：そんなに落ち込んでいるのですか。僕は、ただ小学校最後のクラス対抗リレーだから優勝したくて、D子さんにも選手の一人として気合を入れて欲しかった。だから、ちょっとD子さんにとって、きつく言ってしまうようになったところがあったと思います。「言い過ぎて悪かった。ごめんなさい。」と謝ります。

教師：クラス対抗リレーで優勝したい気持ちからD子さんにきついことを言ってしまったのだね【C男が答えたように返す】。なるほど。先生はC男君がクラスのためと思う気持ちはうれしいな【C男を勇気付ける】。

D子さんに謝るとき、C男君が、今、先生に話してくれたように伝えることは大切だよ。

C男：そうします。・・・先生、僕は相手がどのような気持ちになっているのかよく分からないときがあります。今回、D子さんがすごく落ち込んでいると先生から教えてもらって、どうしてだろうと思いました。

教師：そうか。それでは、今からD子さんがC男君との会話でどういう気持ちになって落ち込んでしまったのか一緒に考えてみよう。

【 ポジション・チェンジのワークを活用したC男の指導の実際 】

ポジション・チェンジのワークを活用した指導

<第1の位置>

教師：C男君はこの椅子に座って。D子さんはC男君の前の椅子に座っているとイメージしてごらん。C男君がD子さんに言っていたことを同じように言ってみよう。

C男：D子、走るのが遅いだから毎日走れよ。優勝できなかったらD子の責任だからな。D子が運動会を休むと優勝できるかもしれないのにな。

教師：今、どんな態度で接している？【考えを深める開かれた質問】

C男：返事くらいしろよという気持ちでちょっとイライラした態度になっているかな。

<第3の位置>

教師：C男君とD子さんの二人が見える場所に移動しよう。

それでは一緒に深呼吸します。この椅子には、D子さんが座っている。そして、こちら側の椅子はC男君が座っている。さて、二人はどんな関係に見える？【考えを深める開かれた質問】

C男：僕がD子さんを怒っているように見えます。D子さんはうつむいて黙っているように見えます。

<第2の位置>

教師：今度は、D子さんの椅子に座り、D子さんになった状態をイメージする（しばらく時間を置く）。

次に、目の前にいるC男君から「走ってるよ。」とか「D子の責任だからな」と言われているD子さんの姿をイメージします。D子さんはどんな気持ちだろう。D子さんはC男君をどのように思い、どのようなことを伝えたいだろうか？【考えを深める開かれた質問】

C男：…（沈黙）。悲しい、つらい、苦しい気持ちです。「なんでC男君にこんなことを言われたいいけないの。」「優勝できなかったらどんな責任をとればいいのか。」と目の前の僕に伝えたいと思います。

教師：それでは、C男君の最も言いたいことがD子さんに伝わったとする。その時、D子さんはC男君をどのように分かってくれるかな？【考えを深める開かれた質問】

C男：「C男君は、小学校最後のクラス対抗リレーだから優勝したいと思っていたんだ。だから、私に選手の一人としてがんばってほしいという気持ちで言っていたんだ。」と分かってくれると思います。

<第3の位置>

教師：では、もう一度、二人が見える場所に移動しよう。

さっきと同じように深呼吸をします。二人の関係をよく見てみます。どのように見える？

C男：D子さんは顔を上げて僕の話ちゃんと聞いている姿をイメージできます。

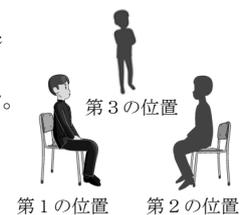
<第1の位置>

教師：D子さんの前の椅子に座ろう。椅子に移動する前と今とで、どんなことが分かったかな？そして、これからどうしたらいいと思うかな？【考えを深める開かれた質問】

C男：僕の言い方がD子さんを追い詰めて嫌な気持ちになっていたことが分かりました。これからは相手がどう思うかを考えて、相手に伝わりやすいように丁寧に話したいと思います。

<リハーサル（練習）>

教師：それでは、先生がD子さんを演じるから、C男君はD子さんの気持ちを考えながら自分の伝えたいことがしっかりとと言えるように、先生をD子さんと思い実際にやってみよう。



このように、いじめた児童生徒の指導において、ポジション・チェンジのワークは、他者理解を深め、相手の考え方や気持ちに気付いたり、第3者としての視点で自分と相手との関係に気付いたりする効果がある。また、こうした体験知に加え、教師の支援によって、児童生徒は自己の言動を客観的に振り返ることで深い内

省に至り、より良い人間関係づくりに積極的、かつ意欲的に変化・成長していくのである。

—参考文献—

- 文部科学省 平成24年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』
- 鹿児島県教育委員会 平成25年度『いじめの問題に関する児童生徒の実態把握緊急調査結果』
- 前田 忠志著『脳と言葉を上手に使う NLPの教科書』平成24年、実務教育出版 (教育相談課)